

熊本県に住む大学生の居住満足度を高める要因とは

-ICT 端末を用いた記述研究-

情報科学ゼミナール 1314006 上村直英

1. 研究動機・研究目的

現在、日本の人口は 2008 年をピークに減少局面に突入しており、今後も加速度的に人口減少が進んでいくと推計されている。厚生労働省の調査によれば、今後合計特殊出生率が現状のまま変化しないとすると、人口の減少幅は拡大し続け、2041 年以降は毎年 100 万人以上が減少していくとされている。その結果、2048 年に 1 億人を切り、2060 年には 9000 万人を割り込むと推計されている。この人口減少には 2 つの要因がある。一つは若年女性の減少で、晩婚化、晩産化、少子化による出生率の低下である。もう一つの要因は大都市圏への若年層の人口流出である。地方から三大都市圏への人口移動は、1960～70 年代、1980～93 年、2000 年代以降の三度にわたって行われた。地方からの人口流出は、大学進学時と大学卒業後の最初の就職時という二つの時点において顕著である。私が今回調査を行った熊本県も人口流出の問題を抱えている。熊本県が 2015 年に出した熊本県人口ビジョンでは、進学、就職等を理由に 15 歳から 24 歳の転出超過が極めて多くなっていることを明らかにした。人口流出問題について様々な政策や研究がなされているが、そのほとんどが雇用創出や子育て支援といったものばかりである。そしてなぜ地方にとどまっているのか、地方の魅力とは何なのかといった研究はほとんど行われていない。

そこで本研究では、都市圏へ進出せず、地方（熊本県）にとどまっている学生について調査を行い、日常のどのような瞬間に魅力・幸せを感じているかの満足度調査を実施する。この調査により、熊本県に住む学生の生活を豊かにしている要因を明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

今回大学生の居住満足度を調査するにあたり、熊本市内に住む大学生 4 名に調査協力を依頼した。調査協力者の内訳は男性 4 名、女性 0 名である。学年の内訳は 1 年生 0 名、2 年生 0 名、3 年生 0 名、4 年生 4 名である。今回の調査は ICT 端末（スマートフォン）を用いて実施した。また、今回は SNS アプリを用いてすべての連絡、画像データの収集を行った。SNS アプリを通じて、対象者に熊本に住んでいて良かったと感じた瞬間、魅力を感じた瞬間を写真に収めてもらうように依頼した。そしてその写真を画像データとして送信してもらった。写真の種類は問わずさまざまな写真を送ってもらうように依頼し、さらに写真のみでは魅力が伝わらない場合に、必要に応じて文章による補足を行ってもらった。このように ICT 端末を用いて一週間画像データの収集を行った。今回収集した画像データは KJ 法によって分析、構造化を行った。

3. 主な結果と考察

4 名の大学生に協力してもらい、24 枚の画像データを収集した。その他に写真だけで

は伝わりにくいものについては文章での回答もあった。それらのデータを写真KJ法で分類したとき、以下の7つの要因に分類することが出来た。①個性豊かなマスコットキャラクター、②郷土料理などの食文化、③熊本自慢の自然、④歴史的な建造物、⑤熊本地震からの復興、⑥慣れ親しんだ友人たち、⑦熊本市内を走る路面電車、である。また、抽出された7つの要因のそれぞれの画像データの数は、①2枚、②3枚、③6枚、④4枚、⑤3枚、⑥3枚、⑦2枚であった。今回の調査結果により、熊本県に住む大学生がどこに魅力を感じているのかを発見することができたが、この結果を地方の若年層の人口流出に活用することが出来るのではないかと考えている。これまでは人口流出の抑制を図るためには地方の雇用を増やそう、という取り組みや、なぜ県外転出するのかを考えるのが一般的だった。しかし、そのような取り組みばかりではわが県の悪い部分にしか目がいかず、そこを改善するための対策しか取ることが出来なかった。それでは地方の良い部分を見つけ出すことや、アピールすることが出来ずに終わってしまう。そこで今回のようになぜ地方に残ったのか、地方の良さとは何かという視点で、学生を中心に調査を行う。これにより、今までの雇用創出に加えて学生目線での良さ・魅力を再確認することができ、県内外の若年層にアピールすることができる。そうすることで改めて住んでいる地域の魅力に気づくことができる。この活動を持続的に、大規模で行いより正確なデータを収集することが出来れば、地方の若者の減少並びに極点社会という現象を回避することが可能になるのではと考えている。

4. 結論

本研究ではKJ法を用いて地方の学生の居住満足度を高める要因を調査し、明らかにした。今回の調査では熊本県の学生を対象に行ったが、違う県で同じ調査を行うことで学生が共通して魅力を感じている要因が特定でき、地方ごとの特徴を明らかにすることが可能になると考えている。それにより、雇用創出や子育て支援などとは違った政策が行えるようになるのではないかと考えている。具体的には、若者の居住満足度を意識した街づくりを行い、若者の定住化を図るなどである。若者がいなくなるということはその地域の出生数低下にもつながっていく。つまり若年層の人口流出は少子高齢化に繋がっているということである。この負のスパイラルを防ぐためにも、若者が住みやすい街、住みたいと思える街づくりをしていかなければならない。各県の長所、地方の長所を理解したうえで対策をとっていくことがより良い地方の創出につながるのではないかと考えている。

5. 卒業論文の執筆を終えて

私は2月後半に卒業論文の研究内容を決めました。4月には卒論の中間発表が控えていたため、3月下旬には事前調査まで行っていました。比較的早い段階から卒業論文の土台を作ることができていましたが、就活や部活動の試合など他にもやることがたくさん増えていきました。その結果当初の予定通りとはいかず満足のいく調査が行えませんでした。後輩たちにはたくさん時間を取って素晴らしい論文を執筆してもらいたいです。